

本 會 岳 Ш H 90

月 昭

十年 + 和 四

たが、沼の畔りの長藏小屋が増築さ ない。こんど二十年ぶりで行つてみ たにあつた豊富な高山植物がほとん が見違へるほどよくなつたが、道ば はりにはならない。森林や濕原の涂 屋が建つただけで、それも餘り眼ざ れたのと、尾瀨ケ原にいくつか山小 が、まだ神河内ほどには荒されてゐ 尼瀬は日光國立公園に編入された

すく行けるやらになつた。 じた。アヤメ平は富士見峠からたや らは佐渡や北アルプス がよく見え れ、燧岳の北麓原始林を巡る途も通 かつた。三條ケ瀧へ行く途が開か 晴れてゐたので、燧岳や至佛山か

が來てゐた。 た。 てゐたが、魚沼の山には早くも新堂 十月三日尾瀬にはげしい霜が 利根の水源にはまだ舊雪が残つ

秋風が小波をたて、渡る。 のなかでは枘の葉が細雨のやうな音 の長藏小屋に四日滯在して、歸りは 草が狐色に化して、沼の面には冷い を立てゝ落ちる。山の田代や濕原は 尾瀬ヶ原の彌四郎小屋に三日、

濶葉樹は一ぺんに紅葉した。林

た。爪で引掻いたとみえて樹皮が大 栃の樹に熊が登つた足跡が残つてゐ の近くまで來ると、道ばたの大きな 三平峠を越えることにした。大清水

潔 も散らばつてゐた。

『それは珍らしい』 『この上に熊が樹に登つた跡があり

ど採りつくされてゐるのは一寸淋し

を立て初めたが、急に恷を出して、 『熊が本當に樹に登つてゐるところ 『寫眞を撮らう』と武田さんは三脚

『恐しいからなあ』

でも、白い雪の上に黒點がある位の ふので、見せて貰つたら、引伸印畫 海道で野生の熊の寫真を撮つたと云 ものだった」 『山岳會の誰だつたかど、いつか北

見せて貰つたら、小さくて眼に入れ とがある」 ても痛くない位のかもしかなので、 かの寫真を撮つて來たと云ふので、 「これではのみしかだ」と笑つたこ 『冠さんも黒部溪谷で對岸のかもし 『それは愉快だ』

分傷んでゐる。 根元には果實のついた枯枝がいくつ て、小枝を捻ぢ切つたらしく、 四 五間も高く登つ

能 0 爪 跡

瀨

ツクザツクを背負つて登つて來るの 吉先輩が年に似合はぬ大きな重いル 憎くフイルムが一枚も残つてゐなか つたので、簡單なスケッチをして、 に出合つた。 1、二丁山を下つて來ると、武田久 爪跡の寫眞を撮りたかつたが、生 でする

私も共に再び栃の樹まで引返して

だつたらなあ」とつぶやかれた。 『熊の生態寫眞は餘り見掛けません

Щ

體登山に、その大部分を費してしま ことが出來なかつた。それ丈けにあ ねがつてゐた山へは殆ど脚を向ける れば望外の幸である。 らの一、二を御通知いたし度いと思 項を追ふてその感想やらニュースや なり豐富にきいたわけである。以下 ちらこちらと、隨分歩き廻ったの つたので、自分が自から行き度いと この夏は集團訓錬を目標とする團 聊かでも會員諸兄の御参考にな 山の新らしいニュースだけはか

『さて熊の足取りでも調べますか』 『熊の指紋も、とつておいたらどう 撮影準備が整つて、シャッターが

て樹の直徑を計る。 てのどかだ。武田さんは卷尺を出し 『約一メートルある』 近くに熊がゐないので、話は至

爪跡は珍らしい 『隨分大きな奴だつたのでせら』 、熊の足跡は隨分見たが、 木登りの

品溪谷を下つてくると、里近い林で こちで栗を拾つてゐた。 と別れて、秋の陽光を溶びながら片 はもんべをはいた山村の兒童があち 招のほとりへ上つてゆく武田さん

(1四·10·八)

ナジ ょ b

村 謙

中

面には人力の偉大さを今更乍ら知る を見て何んとなく淋しく感じた。 と同時に、自然の風景の亡びゆく姿 工が加へられたのには一驚した。一 から下流の黑部溪谷に想像以上の人 二、遠笠山から一碧湖へ

笠山から一碧湖へのみちを辿つて見 たが、これは早春シャクナギやツ、 谷津に開かれた講習會の歸りに遠 (七月卅一日)

一、白馬から黒部

のみちが大分荒れたや うに思はれ 善せられたに反し、森上から大池へ 象は稀らしいことゝ思ふ。本年は中 に再び真丸い太陽を見た。かゝる現 背から黑部へ下る道がいた んだ 爲 る。白馬の山頂では太陽が沈んだ後 近年二股から白馬温泉への道が改 多くは清水越えをした。祖母谷 (七月廿三日—廿七日)

目 次

・山だより……中 K2遠征の一挿話 熊の爪跡…… 廣 村 瀬 **謙** 潔:

スキーワックスの試製 ……吉澤 郎

冬のゼム氷河附近額 田 敏::

Ħ.

……望月達夫譯…

◇會員通信 石原·藤島……… ~ ……伊藤·吉澤·中野·

0

ある。 3 たところが脚の丈夫なものなら、悠 で行かれる。こゝから遠笠山を極め の大川から登ると鞍部まで約三時間 地圖がないので一寸困るが、 その日の中に歸京することは容易で と思つた。丁度遠笠の附近は五萬の 々と六郎姿峠を經て一碧湖に遊んで の咲く頃 の山旅にはもつて來いだ 東海岸

ず、 岩室や賣店の人情を見て 少なか 手を入れて費つて營業者の營利一天 國日本を代表するこの富士山だけは か知れないが、 張の思想を一掃して欲しいと思ふ。 いものだ――それには當局にもつと もつと、氣持よく登れるやうにした 富士山へ登つたのはこれで何度目 三、富士山 さむしく感じた一人である。 三峰から雲取山 年ごとにすさみゆく (八月二日—三日) 興

わけである。 新宿は完全な日歸りコースになつた から三峰―雲取山―六ツ石―氷川― は拒むことが出來ない。これで東京 には乗らなかったけれども、 の交通に一大革新をもたらしたこと ーブルが出來てからは三峰―雲取間 今春完成した三峰の空中ケーブル (八月十日—十二日) あのケ

上信境の旅

た上で、 の爲め抛棄せざるを得なかつた。 からと計畫したが、これは連日の雨 カヤの平から一旦和山に落ち付い 澁澤を遡つて白砂山に取付 (八月十四日—廿日) 2

ことで重要なことは、飯山管林署が 直ちに苗場山へ縱走、頂上に一泊の たことである。 何年か振りで左の林道の刈拂ひをし 上八木澤へ降つた。この間見聞した いて久戀の山「佐武流山」に登り、 代り利山からワルサの尾根に取付

反池までは未刈拂。 管林署の管轄の關係で地藏峠から野 て野反池に達するもの) 但しこれは (a) 大倉線(和山から地藏峠を經

辿った。

道が、お粗末乍らもどうやら通れる て赤倉山から赤湯までは未刈拂。 を經て赤倉山經由苗場に通するも (b) 一旦不通になつてゐたこれ等の林 但しこれも管轄遠ひの故を以つ 前述の利山からワルサの尾根 切開から岩菅山に通ずる林道

日に値する。 び火の消えたやらになつたことも汁 鍍區は強想通りの發掘が出來す、 大赤澤の奥で始まつてゐた硫黃の 再

思ふ。

やうになつた今日、考へやうに依つ

ては相當面白い山旅が期待出來ると

上越の旅

内神社までは立派な徑があり、 て期待した眺望は殆ど得られないの で迷はずに行かれるが、木立の中と から先きも地岡の點線通り相當奥ま 機會を得て初めて登頂して見た。河 れて見たいと念願してゐたがこん度 怪異な姿に見える三峰山を一度訪づ 耳二ツあたりから見ると小さいが (八月廿五日—廿八日) それ

> グラ越え」を越えて東門への近道を 川の出合まで到り、それより「マナ たが、見事に地圖の斷崖をよけて、 らしい路はない。三角點から石神峠 は残念だつた。 一縷の踏跡に出ることが出來た。 へは見當をつけて善加減に降つて見 石神峠から田ノ入り澤沿ひに四釜 三角點附近は先づ路

下發知川沿ひの歩道には軌道が敷か 近で東京管林署の作業が相當大仕掛 脊先きなら完全に通れると思ふ。 を經て發知川畔に拔けた。この道は もきかず、 れ、非常に歩き易い。玉原越えの附 秋山平」に出で、所謂「天沼步道 迦葉山からは土地の人の云ふこと 敷をこいで 西北の鞍部

から三角點まで五時間あまりで樂に 辿りついたと云つたなら、嚥ぞ艱難 北に向ふ尾根を竪上りに上つて△一 を進んで大石澤を涉り、それから西 低鞍部に出で、他は更に本流の右岸 澤を遡つて笠ヶ岳と白毛門山との最 渡つて廣河原に達し、一はウツボギ てゐることは、皆さん旣に御存じで 九四五米峰に達してゐる。寶川溫泉 に左岸を進んで狙嵓の手前で右岸に せら。板幽まで通じてゐた步道が更

で湯檜曾川の出合まで約一時間半を つゝ赤倉尾根を降つだ。急峻な下り 笠ヶ岳からは雷雨に傷めつけら

要した。

通する佛岩越えは正に初心者向きの 水上から赤瀬入りを經て猿ケ京

稻包山へ登つて見た。ムタコ澤は洵 もなく、全く地岡通りに容易に遡る に無難な澤で、これといふ瀧も惡場 ゐた。山頂から暫く郡界尾根を傳つ 十五分藪を漕いだのみである。 ことが出來た。頂上まで約四時 稻包山から四萬へは新道が出來て 法師温泉からは無多子澤をつめて 間

けに初まつてゐる。 資川から笠ヶ岳へ觀測步道が出來 付いて赤澤山をまはり、ブノウ澤の

ることであらう。 辛苦された武田先生あたりに驚かれ 3 のことである。 出合に向ふ記號尾根に出る豫定だと

最初の小屋から赤澤山の北鞍部に取 ふ。大體の豫定は法師側から登つた 修されて半みちばかり近くなるとい 林道もこの秋の紅葉どきまでには改 木根宿のトロ道に出るのである。 南微西に派出する大門尾根を降つて 岡の道に出で、十分ばかりの後再び 派出した太い尾根を一氣に降つて地 て降り、それよりイモリ澤に向つて 又法師できいたところでは、赤澤

づこんなことで御兇を蒙り废いと思甚だ雑駁で相済まぬ次第だが、先

K2遠征の一 交換せる書翰の披露 セラ及びハウストン 捕 話

0

澤 郎

丁度私が「山岳」第三十四年第

から九時頃まで。

圖書室係

届いた。伊太利語は音樂に使ふアダ 本山岳會の事務所に「伊太利山岳會」 のK2遠征報告を譯してゐる頃、 方も使はれる相である)との間で手 るやらになつてゐるがハウストンの は此の名前はヒューストンと發音す ある。どらもその様子がヴィットリ K. 12"といふ見出しで何か書いて spedizione americana Houston al けて見るとK2の素晴しいのが載つ 知らないが寫眞は萬國共通なのであ デオだとかマ・ノン・トロッポ位しか 號に出てゐる米國隊 (一九三八年) とは昨年日本へ來た時帝國ホテルの つて英譯して貰ふやらに賴んだ。 登つたトリノ在住のギリオネ氏に送 てバルトロのクヰーン、メリイ峰に 三四年にデイレンフルト隊に加はつ た。仍で私は早速此の雜誌を、一九 紙をやりとりしてゐ るらし く思へ オ、セラとハウストン(人名辭典で てゐる。その次へ持つて來て"La の機關誌「レ・アルピ」 七月號が 室で二時間許りブロークンへ私 (はである) で話した事があり、 H

その他 本會圖書室開室日

會室の利用をお勧めする。 ら六時頃まで、月水金が午後六時頃 ひは前號にも載せたが、重ねて茲に 開室日は、火木土が午後一時頃 本會の集會室及び圖書室へのお誘

しいお願ひをした課た。 りしてゐる間柄なので右の様な厚釜 など送つて臭れたり手紙を寄こした の後も時々伊太利からスキーの雑誌

ねた。 に打つた四枚許りの英譯が這入つて といふ意味の手紙とわざくくタイプ 守だから代りに私が譯して送つた、 アさんから一通の書留が來た。 へ來たのである。 て見ると、今主人は南米へ行つて留 所が一週間許り前に奥さんのルチ 奥さんも御主人と一緒に日本 開け

ばならない。 の御親切を厚く感謝して置かなけ のであるが、此の機會にルチア夫人 事情から弦に發表出來る事になつた たに掲げる拙譯は即ち前記の様な

合せの手紙を寄こす。 K2に遠征し、記錄的にも藝術的に 々の事情や注意、寫真等に關して問 しては、多くのヒマラヤ探檢者が色 の有名なヴィットリオ・セラ氏に對 も非常に優れた寫真を齎して來たあ 九〇九年、故アプルツチ侯と共に 伊太利山岳會の名譽會員であつて

端腔の感謝を表すると共に、 處にその全文を掲載する事とする。 分とそれに對する感想文を伊太利山 氏は親切にもその裡の最も重要な部 非常に興味ある手紙の往復をした。 岳倉の編輯部へ送つて吳れた。今此 米國のK2遠征隊長ハウストン氏と 伊太利山岳會々長はセラ氏に對し 最近氏は紐育にゐる一九三八年度 ハウス

> プルッチ稜」といふ名稱を附與せら 立 する。右記念物はトリノにある「國 隊の使用した幕管用具の断片を送ら れた事に對し深くその御厚意を感謝 れた事、並びに一九〇九年の伊太利 永く所藏させて戴く事となつた。 山岳博物館」の「アプルツチ侯室 ン氏に對してはK2の南稜に「ア

九三九年三月十八日 於羅馬 セラ

片を發見された事を御承知の事と思 諸偵察中、第四キャンプ附近に於て 氏等の米國K2遠征隊がK2登攀の た遠征隊の使用した木製食糧箱の斷 一九〇九年アプルッチ侯に率ゐられ 委員會では既に、昨夏ハウストン 太利山岳會編輯部御中

加へてあった。 断片の一つを呈上せられる由を附け ぬ試みを行つたに過ぎぬ事を述べら べく命名した南稜に對し取るに足ら き精神を以てアプルツチ侯を記念す を出した。氏は折返し返事を寄こさ きを感じ、早速ハウストン氏に宛 持ち、尚その上アプルツチ侯等の最 て、一層の詳細を御通知願ふ様手紙 高到達點の意想外に高かつた事に驚 私は此のニュースに非常な興味を それに就てのニュースと前記の まづ最初に氏の遠征隊は、氣高

「アプルツチ侯」の博物館に送る心算 謝すると共にその歴史的記念物を 私は之に對し氏の親切な申出を感

ンプに食糧を搬び上げるのに可な

した、

何となればウルドカス(ルド 下方パルトロ氷河の左岸

3

の最も感動的なエピソードでありま

願により氏の登攀に關する詳細を決 ŋ への途字譯は私がやつたものであ の書翰は即ちそれであつて伊太利語 つて來られた。二月十一日附の後揭 なる事を返信した。 氏は尚私の懇

ぶべき寫眞を貴編輯部へ送附する事 その遠征とアプルッチ侯の名譽を偲 此の勇敢なる米國登山家の書翰及び 得るものと考へるので、 り且つ伊太利人の誇りを高からしめ 辿る事が出來た。之は非常に興味あ ストン氏の記述が詳細を被めてゐる にした。 ので、私は寫真の上でそのルートを ートと同じ所を通つて居り且つハウ 且つ部分的にはアプルツチ侯とクー ルマイエルのガイド達とが採つたル の重要な登攀には南稜が選ばれ 私は敢へて

迫 記

○米突以上では寒氣凛烈でハイ・キ 西風が屢々襲つて來る。而も六五〇 る。それはアプルツチ稜が直線的で 疑ひない。然し心配な事が一つあ 行の計遊に大なる貢献をなす事には 九年の夏の經驗によると非常に强い ルートとしてはいゝが、私の一九〇 なる諸仰に値する事は確かである。 の成功が本年度のウイースナー一

> ŋ の困難を感する事である。

九三九年二月十一日 紐育にて C・S・ハウスト

ヴィットリオ・セラ殿

御親切な御手紙と見事な寫眞有難

左方(西方)に向つて延び上りアプル するに常りぶつかつた最初の點は、 ります。吾々はアプルツチ稜を攻撃 た吾々のルートは殆ど正しい様であ と感謝致して居ります。 ら戴いたといふ事は此の土ない名譽 ありますが、それを撮影者御自身か ましたので皆お馴染みの寫真許りで ら此の山に就ては色々研究して居り く拜受致しました。私は十四年前か 扨て寫眞の上に御書き入れになっ

會のベスト・メンバー總ての心から のだと思つてゐる。之が伊太利山岳 でハウストン氏等の成功は非常なも 繞る諸山稜の困難さを知つてゐるの 私はまだ自分の記憶の中にK2を

此等の斷片の發見は吾々の登攀中で 食事の時に卓として使はれたと覺し 時、東寄りに登つて行つた時の事で き一寸した高みの上にありました。 上方約八〇〇呎(三五〇米突)の所、 ありました。此等の斷片は幕營地の 場を見つけ小枝が散らばつた儘にな 部であります。吾々は其處にテント た斷片を發見したのは最初の偵察の つてゐます。伊太利隊の殘して行つ ートは岩の主稜の上をすつと東へ向 をうけました。此の上から吾々の つてゐるのを見て非常な驚きと感動 ツチ侯の露替地の附近で岩の斜面と 一緒になる大斜面の東方支稜の最低

のでは最初であったからでありま で見付けた以外、 伊太利隊のも

困難は吹雪中の下降を絶計に拒否す す。殊に登りに體驗して來た下部の 不可能であると考へたからでありま だけで安全に吹雪の通過を待つ事 貯への食糧(六日分は充分あつたが) 斯る高みで執拗な吹雪にでも週 るものでありました。 退却を決意したのは此の點で、 の左側で頂上へのルートを提供する た。それは氷塊の瀑となつてゐる所 ザグに頂上の方向へ進みました。 (七、七二五米突)——肩—— と思はれる場所であります。吾々が 踰え吾々の最高點へ達しました。 落ちて來てゐる氷壁の左端(西端)を で二、五〇〇呎上の頂上から「肩」へ り、それから左方(西方)へ向ひヂグ にとりつき、次に下にある氷河へ落 登りました。 吾々は 二五、三四七呎 ちてゐる一枝になった氷面の稍々左 それで吾々は南面の下部に見事に落 ちる氷塊の中を東方へ餘儀なく横切 上にある事を知つたのであります。 吾々は一つの頭の上に立ちま 吾々はこれでアプルッチ稜への (西側) に沿ふ様にして真直上に の南端 つば は

からでありましたが、天候を考へる より一層劇しいとは思はれなかつた す。それは前途の困難が下部のそれ れば行けぬ事はなかつたのでありま 要が充分にあり、 若し吾々が頂上へ行からと決心す 且つ吾々及び擔

決心をするに至つた次第でありま る望みは持つて居なかつたので右の 夫の生命を犠性にしてまでも決行す

攻撃には最上の而して最も安全なル

ルツチ稜即ち南稜こそはK2の山頂

要するに吾々の偵察によればアプ

ートである事になるのであります。

であります。

ンにあつたのであります。 狀態のよくなる事もあり得ませうが は問題外でありました。年が變れば には危險であり、又荷を負つた者に の登攀は困難であり綱に結ばれた隊 はれて居りました。此の最後の部分 になつて居り而も不安定な新雪に敬 が御承知の様に非常に急で且つ青氷 した。あの時は鞍部の下部八〇〇呎 ア鞍部からの西稜へは遠しませんで 吾々の時には全く悪いコンデイショ 吾々は四度試みましたがサヴオイ 事は出來ませんでせら。從つて彼の が含まれて居ります。事故なき退却 とは云へ其處には多くの技術的問題

備しなければなりますまい。 キャンプ用の天幕と糧食を充分に準 を確保しやうとするならばハイヤー

フリツツ・ウイースナー氏は今夏

とへ之が通過出來ても二五、〇〇〇 といふ事でありました。然し此の鋭 米突)まではさしたる困難はない、 合ふ所 (二二、〇〇〇呎、六、七〇〇 感じは、山稜が西へ曲り鋭い氷稜に 最低所にある氷河の上を一千呎許り 凡ゆる角度から之を觀察し、同稜の の必要のあるものであります。私は 面の斜面に出るにはどうしても横斷 すが、吾々が南方から既に達した南 の峰頂の大きな氷壁の眞下に當りま を横切らねばなりません。之は最後 呎(七六二〇米突)の點にある雪の肩 ぶには大いなる障礙となります。た い氷稜はキヤンプや補給品を持ち搬 登りました。此の稜に於ける吾々の 吾々は北東稜も同様に考慮に入れ

にアプルッチ侯の遠征に對する吾々

紙を厚く感謝致します。貴殿並び

最後に私は再びセラ氏の寫真と御

した日を決して忘れは致しません。 ウイン・オーステイン氷河の上で過 ります。然し吾々はパルトロやゴド を共にする事の出來ぬのは残念であ す。吾々のグループの誰もが彼と行 張りアプルツチ稜を登る筈でありま 隊員は全部新しくなります。彼は矢

> カ 九三四年 九三三年 フォレイカー クリロン山(アラスカ) 山(アラ

三年過ぎたら又何處かへ行きたいも 分山(遠征)には出掛けられぬが二 のですと書き加へてあった。 九三六年 九三五年 追つて本年以後は仕事の都合上當 K 2 ナンダ・デヴィ アルプス

キーワックスの 試製

ス

務上の束縛から一人も之に参加する ます。吾々一九三八年度の隊員は職 米國隊の隊長として再びK2へ向ひ

た。ことにスキー用品などは、これ 内で製造して使はねばならなくなっ つた爲めに、我々は色々な品物を國 外國製品は時節柄輸入されなくな H 敏

ものでないから、大いに邦産品で間 が無くては國策が成り立ないと云ふ

に合はすべきかと思ひ、私は一二年 前から(尙前から)色々な種類のワ とが甚だ速い點に在ると思ふの 性能の變化しないこと、特に滑るこ 温度に對して(可成り廣範圏に於て) を乞はんとするものであります。 つにつきこゝに照會し、讀者の試驗 い處の性能の比較的優秀なものゝ一 す。その内特に今迄我國に餘り見な ックスを造つて使用して ゐ る の で それはグライトワックスの一つで

ツチ侯並びにゴドウイン・オーステ

きなものであります。吾々はアプル

負債は到底御返却出來ない程の大

立

てばと念じて居る次第であります

のなし遂げた仕事が幾分でもお役に イン氏の足跡に從ふ人々に對し吾々

によつて氏の登山經歷を掲げて置く 九二五年 **尙最後にハウストン氏よりの手紙** アルプス(満十一歳)

混和成分

黃 グラファ

10-10 五〇一七〇 調合割合(%)

の種食誌の生命は輝きを増し、

惹い

なくとも最上のルートと考へるもの 此の絶巓の南部こそ、唯一とは云へ

> 度附着度の特性を有します。 す。そして色々の調合品は夫々の滑 **尙此外種々なる調合の製品も出來ま** 木タール

10-10

は蠟及び木タールの景に關係する事 クでよく摩り込む時、非常に微細な です。このグラファイトは塗蠟の際 イトは今迄餘り用ひられなかつたの てゐる成分でありますが、グラファ んど總てのワックス中に混合せられ あることを特に注意するものです。 ンヒルのレースに大いに使用效果の の試験に待つ事に致します。グライ と思ひますから、讀者諸君内篤志家 を大いに高めるものです。持ちの點 粒子狀となつて木部に附着して滑度 トの效果の大なることはことにダウ 木部に摩り附けて後、手か或はコル 此内黃蠟・蜜蠟・木タールは今迄殆

で 自發的な投書を俟つてはじめて獨特 稿入手に奔走するつもりですが、こ す。一年に一度でも結構です、葉書 の色彩を出すことが出來ると信じま のやうな會誌は矢張り全會員からの 編輯者も出來る限りの努力をして原 の御寄稿を切にお待ちしてゐます。 稿者の額振れが廣範園に亘る程、 れをポストへ抛り込んで下さい。 でも便箋へでも、氣易く書いてそ 何時ものことながら會員諸氏から

一、番人 平林次男(島々) 一、所屬 日本アルプス案内 く、二三年積雪期を經過せざれば 高側よりの雪崩は稍勢戒を要すべ **雪崩には安全と思はる」も、** 右御報告まで。 永久性並に安全性不明なるべし。 **營業の由。倘右小屋は背部よりの** 本年は十月一杯位、新雪の來る迄 收容 二十名位。 (小谷部全助) 人組合

一, Τ, 始(起工昭和十三年秋)。 場所 昭和十四年九月一日より營業開 涸 澤 約二四〇〇米突 **凋澤小屋** 穂高凋澤、池ノ平、 高澤出合西岸の岩壁直下 小 屋

曹報へ投稿をお願ひします

投 憚ない聲を聞かせていたゞくことも が賑やかにこの紙面を飾るやらにな は會へ對する色々の注文、意見など 定或は準備に對する示唆など、更に 與へることにならうと考へます。 ては食自體の動向にも確實な根據を 會報の一つの責務だと考へます。 さらですが、この際に食員諸氏の忌 定など會へも一つの大きな轉機が來 ることを切望します。法人組織の設 秋の旅行の収穫、來るべき冬の豫

たノース・コ

ルからカ米の北尾

£

ム氷河のB・Cからはター

は

ネパールギャップ氷河とゼムの

九三四、

九三七、

サ n 100 三六、ナンガ・パルバツトー エヴェレストーー

ーフ氷河とは、シュガーローフから

トウインス氷河へ注ぐ地圖には無名

又ダ・トンダツプのは次の通

九三三、一九

フ氷河を登つて行つた。

シュガーロ

は、天候は再び好轉してゐた。 ン・レークの西端に達した十八日に 既にあらゆる方面から試みられて

ゐるが、强力なるバウワー隊が、

クタンでは雨に降られたが、グリー

ン人を伴つてゼム川に這入つた。

翌十五日、吾々は九人のラッチ



ム氷河附近

望 ジョン・ハント 月達夫譯

ば問題にはならないが、カンチェ 征隊の紀行で、 毎年一二条位づム人類の登頂を許 的這入り易いシッキムの山々は、 特に注目す可き點が在ると思ふ。 初冬の狀態を明瞭にしたことに、 スとの中間鞍部)を目指したこと ンジュンガの北門をなすノース・ の初冬、ゼム地域に這入つた小遠 してゆく。この一文は一九三七年 と、今迄餘り知られてゐなかつた ルへ北東稜の結合點とトウイン ヒマラヤの内でも比較 登頂の敷から云へ カ楽のルートは、

> ねないが、 、 らである。 根を目 つた獨逸隊の消息に就いて 夙に注目されてゐたものでも の偵察をしたのではないかと た外未だその詳細を聞知して は、テント・ピークに登頂し あつた。今年シッキムへ道入 は慧眼なケラス博士によつて 偵察の價値がありさ すルートは、 或はノース・コル 因に、この北尾根 將來更

Hunt and C. R. Cooke (II. J. Vol. X. 1938.) the Zemu Glacier" by - "A Winter Visit to John

スとの鞍部)に達すべき可能性を確 0 コンガピーク1を試みんとするもの 0 ンション氷河に突き出してゐる一ツ 最も東寄りのもの)の東尾根からト めることが出來るかも知れず、 ンスの最高峯への可能的ルートを求 つて、この方面からカンチェンジュ めること」なった。斯くする事によ て、ノース・コル(カ峰とトウイン ンの變更がなされ、ゼム氷河を訪れ ンガのピーク1 へその三ツの頭の中 右の目的が不成功に終つたとして ガの最高點 あつた。が結局ダージリンでプラ 顯著な稜をとつて、カンチェンジ が企てたもので、カンチェンジュ 此の計畫は一九三七年の秋、 (ピーク3) 及トウイ クツ

> たからである。 遙にその他の登攀が出來ると思は ン氷河にB・Cを置いた場合よりも

の獨逸隊の一行と邂逅し、ダック・ シュマデラー、パイダー、グロープ ラッチェンに達し、そこで折良くも り落着いて、吾々は美しい冬晴れを 人で、 バンガロウに同宿して、ゼム氷河に 期待することが出來た。十月十四日 チェンに達する前から天候はすつか へ行くに從つて次第に好轉し、ラッ の一週間、例外的の惡天候は、 先發した人夫達と一緒になつた。 しテイスタの谷沿ひに進み、マカで 一行はクツクと私及び私 十月九日、 ダージリンを出發 の妻の三

險の為、 ○呎迄下つてくる。かくて彼等はシ この時分になると 雪線は 一三、〇〇 くされたのであつた。 ネパール・ピークでは板狀雪崩の危 ニオルチュの登頂には成功したが にそのB・Cを設置し續けてきた。 八日以來、新らしい積雪約六呎の中 あつたと云ふ。そして彼等は九月廿 は、山でも猛烈に悪い天候の連續で 十月上旬 ダージリンで起つた豪雨 て興味ある話を聞くことが出來た。 頂稜直下から退却を餘儀な

人、之等の人々であつた。

目指すに絶好の地點と思はれる。 置した。この位置は、ネパールギャ 呎の地點で 〈曾てバウワーがそのC ンス、さてはゼム氷河の最上部等を ップ氷河、 IVを置いた地點)、 流とが合流する、 シムヴ・サドル、トウイ 此處にB・Cを設 高度一六、二〇〇

デイ(ブウテイア)、それから天幕内 ラム遠征隊に隨つたパサン・チャ 同様な素晴らしい經驗の持主のダ・ イア)、一九三六年 佛蘭西の カラコ トでCMに達したリンヂン(ブウテ エルパン、一九三三年のエヴェレス ヨモラアリイに登頂したパサンへシ トンダップ(シェルパ)、今年早々チ ン・キクリ(シェルパ)、それとほど の者は歸へして了つた。この六人と に適せる六人の人夫のみを残して他 のみを残したが、今又高所キャムプ の雑用の爲にハワンと云ふネパー は最も豐富な遠征の經驗者たるパサ

滯在した彼等の六週間の行動につい

九三四、 は次の通りである。カンチェンヂ 三三、ナンガ・パルパット ュンガ――一九二九、一九三〇、 一九三一、エヴエレスト―― 因にパサン・キクリの經驗 ナンダ・デヴィー

> ンリイ――一九三 九二九三 Ŧi, ガンゴドリ

ダップと二人で、獨逸隊のCVの 河に簡單な登行をなし、二十日、私 タ石を覆ひ、 登行は深雪中にかなりの足跡をつけ 暫く登行を續けた。この二、三の小 點にゆき、又トウインス氷河の方へ し登つてみた。二十二日はダ・トン 近の偵察に費やされた。 の下迄も潜つて了ふのであつた。 ることが出來た。深かい軟雪はゴ は人夫を連れてシムヴ・ラの方へ少 は、私と妻とでネパールギャップ氷 最初の三日間は、 先頭を行く者は屢々 荷物の 運

點で人夫の大部分を歸へし、十四人

吾々は既に獨逸の連中のCIOの地

的な强い光線の爲に、顏にひぶくれく、加ふるに此の時分としては例外 とキクリとを連れて、 出來なくて、 くの吾々の天幕)を出發することが ウインス氷河とゼム氷河の合流點近 調子惡く、「ブルダー・キャムプ」へト が出來た程であつた。翌日クツクは 行程は意相外に辛らかつた。雪は深 トウインス氷河を登つて行つたが、 日にはシュガーローフに登る目 に荷物は全部搬び上げられ、二十三 待つことは出來なかつた。二十二日 (一) シュガーローフ(二一、四〇 雪の狀態が落ち着くのを、 ○呎)の試登(一○・二三—二六) 私は妻の外にリンヂン シュガーロー

の一米河に、

否々の與へた呼稱であ

たのであった。 二時半ブルダー・

キャ

度雲が卷き上り、北西風が吹き出し 幕を設けた。人夫は翌日再登せしめ て、 てやつた。天幕内に落付いた時、丁 ることにして、午後一時半頃かへし ュガーローフの南面の基部直下に天 ○○呎のや1廣い平らな地點に塗 更にその約七百呎上方、丁度シ その風は夜通し強く吹きまくつ 氷瀑の右手を登り、 約一九、〇

は、 十時十五分西尾根の稜上に達した時 斜と高度馴致の不充分の爲に、午前 のであり、その上五十度に餘る急傾 することに決めた。しかし雪の狀態 に向つてその南側のフランクを直登 た。烈風に舞上る雪烟と、嬢なブレ れてゐる一コルに向け登って行っ ウワーの こから頓に増してゆく様に思はれ ダルムの下部に達したが、困難はそ に暫く前進して顯著な一つのジャン は同様に惡くて、 前進は洵に困難であり、遂に西尾根 ーカブル・ウインドクラストの偽に 翌朝は七時十五分に出發して、 極度に疲れて了つた。吾々は更 地圖に六、一七〇米と記さ 登攀は遅々たるも

再擧を企てんとしたが、身體は休息 を要求し一先づ下降にきめて、 てゐた。吾々はもう一晩滯在して、 て烈しい疲勞を感じてキャムプに戻 降路はずつと尾根を採つた。 キクリとリンヂンとは既に來 午後

> ムプに帰着し た。 廿九日には、 午然吾々の登攀徳も亦旺盛とな グリーン・レーク

プレインを睥睨し、

大な損失であつた。 に荷上げに行つた時、一行中のチャ の人夫と共にネパールギャツア氷河 を出してゐた。更に廿八日私が三人 ものであらう。そこに着くと高い熱 な努力で彼はB・Cに歸へり着いた 々が分擔して擔いでやつたが、非常 下る途中かなり悪かつた。荷物は吾 降中から病氣になり、既にB・Cに にも人夫の中の最强者たるリンヂン ップがあるとみて差支へなからう。 爲に、吾々には可成のハンデイキャ 遠征の初期にあること」、深雪との 技術的困難さを提供してをり、更に は荷物運搬と云ふ點からみて實に重 カデイは遙かに後れて了つたが、彼 して床に就いて了つた。之等の事件 も亦明らかに病氣であり、高熱を出 翌日吾々はB・Cに戻つた。不幸 シュガーローフの西尾根は相當の 前日の午後シュガーローフの下

に達して、

\equiv カイルベルグ(一九、〇〇〇

10

そして遂に二一、〇〇〇呎近く

で退却を餘儀なくされた。

殊にリンヂンはかなり悪かつた― つたが、二人の病人があつては― ギャップ氷河に前進根據地を設け、 れる様にしてやらねばなら を少なくもラツチエン迄、無事に下 を狙はらと云ふのが吾々の計畫であ トウインス乃至はネパール・ピーク の計畫は論外であつた。吾々は彼 次の日(十月廿九日)はネパール な z)×

> 糧等を持つて目的に向つてゐた。約 計畫したのであった。そして一時間 二頂上をもつカイルベルグの登攀を じつとしては居られないので、一寸 伴ひ、天幕一張、寢袋、二日分の食 後には吾々三人はダ・トンダツプを 登攀は手ごたえがあつたが、綱に三 のクーロアールは深雪と氷とが交互 なクーロアールを登つていつた。こ グしてゐる顯著な氷稜の左の、急峻 イルベルグの岩頂と雪頂との間のコ ルートの偵察に出掛けた。そしてカ の休息をとるや明日の登攀に備へて トンダップをかへした。寒風は强く 三十分、この峯の西側の小氷河地域 三時間程岩屑の斜面を登り、十一時 人結びあつてゐるのでかなり時間を から、この氷河へオーヴアーハン そこに天幕を張り、ダ・ 傾斜は五十五度を算し、 岩米と雪米との 倒されるのを心配して、 じめた。真の頂上たる岩頂は今や吾 河の線を通つて一つのジャンダルム 易な岩屑のガリーを登り、ヒドン氷 地域を少し北方に迂廻し、次いで容 こと」なつた。私とクツクとは氷河 きめた。 吾の眼前氷に鎧はれて聳立してゐ た。晝近く天氣は崩れ、雲がまきは した。雪頂へは堅雪上の登攀であつ を避け、この山の雪頂下の尾根に達 ネパールギャップ氷河からのより大 十呎しか高くはない。けれ共今は、 る。高度は吾々の居る雪頂よりも六

地は惡かつた。このサイトはとりわ 下降に決して眞暗になって天幕に歸 時半、高い方の岩頂に登つて夕刻前 げ吹き曝しの場所であった。 つた。夜は風が吹き、 に蹄幕する事の不可能なるを知り、 要した。コルの直下に達した時は三 窮窟な爲居心 つた。

分日陰になり、又風に吹き曝されて ねたので、 九時近く迄陽光はこの地點に届かな かつた。例のクーロアールはまだ當 翌朝も風の猛威は衰へす、 他のルートを探すことに

> 一方留守の間に天幕が吹き 妻はのこる ではなく、 ばならなくなった。 乍然幸ひにも二人の病人は次第に

グラムも進行させる譯にはいかなか 確な徴候のない限り吾々の次のプロ ず、同時に彼等が快復に向つてゐる まだく、氷河を下ろすことは出 人の容體は除り良くはならないで、 B・Cに歸へつてきたが、二人の病 ン・キクリも來てゐた。午後四時半 は辛抱强くそこにがん張り、又パサ にとつて午後一時天幕に歸つた。妻 に合し、例のクーロアールを下降路 かくてコルに下りて昨夕達した地點 て下山する方が賢明な策であつた。 ギーをセーブし、この雪頂に滿足し いなる幾多の目的に備へて、エネル

に表はれ、

(III) ネパール・ギヤツプ氷河へ

廿七日からの天候は決して良いも はB・Cですどされた。そして十月 斯くして十月卅一日、 十一月 H

え降つて、夜になる迄は止まなかつ Cでは晝間は寒く、風が强く、雪さ たが、右側の堆石に達した時、 てつけた足跡はまだ幾らか残つてゐ て行つた。十日前に非常に苦勞をし ヴ・ラを訪れんとして氷河を横切つ た。十一月一日、私は妻と共にシム 氷河の末端から這ひ上つてきた。 ぶ强い北西風とは逆の方向に、 烈しく降つてきたので前進を止めね 谷の雲は、 高所を吹き荒 \mathbf{B}

荷を居いた地點から引きかへしで、 思はれてきた。十一月二日吾々三人 幕を張り之をCIとした。翌日は一 になつたら、直ぐこの二人に附き添 リンヂンとチャカデイとが歩ける様 を連れて出發した。妻は去る廿八日 はキクリ、ダ・トンダツブ、パサン ヤツプ氷河に前進することが可能に 良くなつて、いよく、ネパール・ギ 米瀑の頂にあるセラックスの下に天 けてくれた。 つてラツチエン迄行く役目を引き受 かくて吾々は更に前進し、

雪は屢々深く潜つて了ひ、之は又ネ 强さをも示してゐた。 行く者にとつて、實に辛い前進であ を建設した。この日の行程は先頭を ぶ尾根上最低コルの真向ひに、CⅡ ローフとトウインスの低い案とを結 九、五〇〇呎の地點、 パール・ギャップを越えてくる風の た。即ちウインド・クラストした 即ちシュガー

あつた。尾根で風に攫はれたクツク 文字通り體を宙に浮かされることも 催かの合間しか許されず、屢々私は が出來た。行動は只突風と突風との 綱も結ばずにギャップへ達すること 附からなかつたが、物凄い突風中を 以て氷河を登つていつた。食糧は見 又トウインス乃至はネパール・ピー 荷上げに、又私とクツクとはネパー の帽子は、一度ネパールギャツプ氷 クへの可能的ルート發見等の目的を が残してきた食糧を探すことと、 ル・ギャツアの偵察と、獨逸の連中 十一月四日、 人头は残した荷物の 將

きた。 を目指すことに決めたのであつた。 らは一寸無理なこともはつきりして 性があつたが、高い峯は此の方面か トウインスの低い墨は明らかに可能 可きルートを見出すことが出來、 パール・ピークの南西米に達せらる それで先づネパール・ピーク 氷河で休息をとつてから、 叉

製 本 0

件

年迄御受け致します、 見合せ願ひます は只今の所材料無く當分の間御 岳の製本御依賴は第三十 三十四年 三

通 信

といふいでたちで目の前に見える金

赤倉と熊の湯 伊 藤 政

क्त

又落付いた氣分を樂しむ事が出來ま も風呂場を新築し、 人や山を愛する 者の みの集りの様 れした連中は餘り見られず、若い人 落伍した爲めか、熊の湯へは都會づ 毎に滿員なのに驚きました。俄雨で です。野尻湖はその點滿足でした。 好くても土地の食物の悪いのは閉口 觀光ホテルは別として、サービスが 屋で謝るのが大變だつたさらです。 夏は閑散だつた由、本夏は滿員で宿 を歩いて居りました。この土地も昨 生活を餘儀なくせられて、赤倉附近 小生も、本夏は健康上、 志賀高原では丸池行のバスが發車 北アへ毎夏寫眞撮影に出掛ける。 **氣持ちが好いものです。熊の湯** 鐵道省山ノ家は 赤倉に療養

ネパールの側へ流れる様に落ちて行

河の上をクル~、舞上つたが、再び

つて了つた。

した。 冬のシーズン以外訪れられない方

るだらうと思はれました。 ものです。將來夏期滯在者が多くな も一度は熊の湯も樂しんで戴きたい (八月二十七日) 熊の湯にて

織く

Щ 古 泽 郎

樓を出て浴衣にハンドバッグ、 た私は、 で箱根の仙石原へ行つた時、近頃餘 山へ行けないのでウグーへしてる 先日(九月九日)會社の課内旅行 翌日十日の午前五時に仙郷 草履

> ない、といふ事をふと考へついたと は七時、 いふ事を弦に御報告申上ぐる次第で 行くんだ。全くボヤついては居ら 事を考へ、ド偉い仕事をやり遂げて してゐると知らぬ間に他人はド偉い 事が世の中にもあるのだ。ボヤー らざる事なんだ相である。歸つた時 それより早いといふのは有り得べか 吳れなかつた。普通四時間、健脚者 られる譯がない、といつて承認して た。つらく、思へらく、同じやうな 許りで皆鼾をかいてまだ眠ってゐ 三時間といふのが相場なんだ相で、 がどうしてもそんなに早く行つて來 で往復してしまつたのだが、宿の人 山へ登つて來た。正味一時間四十 頂上での休憩を入れて二時 昨晩相當トラになつた連中 間

札 幌 þ, լի 野 征

紀

尾

O

島敏

男

すぐ

内したいと思つたのですが、短時日 黒いのとで美しく、來札の槇氏を案 大雪、十勝は雪と紅葉と偃松と岩の す。(十月八日) の滞在で時間がないと言はれ残念で ヒュッテのあたり、紅葉の盛りです 丁度いま札幌の近郊、ヘルベチア

山 石 原 Œ

直

白

厳しい殘暑にあへいで居る時休みを 得たのを幸ひ飛驒の大家族制で有名 な大白川郷より大白川温泉に泊り白 九月十日十一日十二日、 打ち續く

殊に勝れて居ます。東は大利アルプ い素晴らしさです。頂上の大觀も亦

爐邊に岩人を集めて長藏老人が咳一 数が勢揃ひするといつたあんばい、

リン統制の爲め一日一囘となり豫定 居ました、市野瀬からのバスがガソ 彌陀ケ原の雪田も可成り廣く残つて 溪はカンクラ・水屋尻共に相當多く りました今年は旱天繚きでしたが雪 だと云ふ事をつくへ感じました幸 ですが白山は飛騨から登らねばダメ 山へ登りました大白川温泉はほんと 汝峯を廻つて舊道を元白山溫泉迄降 ひ快晴に恵まれ御前米より劔ケ米大 瀧です、飛驒からは始めて登つたの しました名瀑白水瀧もなかくしよい しい溪谷美と共に仙境と云ふ氣が致 に氣分の好い山のいで湯で附近の美 数の番狂はせを楽しました。

り十六日の朝には上りました。 そろく、天候が怪しく成つて來たの 出來るとかで途中は道路工事が始ま まだ十日程早い様ですがとても美し ました。川原樋川の溪谷は紅葉には れましたが、尾根傳ひに澤垣内に出 神岳頂上より相當ヤブと露に惱まさ 子ケ嶽に登る可く出發しました。 天候ははつきりしませんが八時伯母 参り天候が崩れましたので頂上の坊 さかのぼり伯母子峠に登りましたが つて居ました。出合橋からコノ橋を い處でした。來年からは自働車路が に泊りました夜中から雨は暴風と變 十月十五日より奥高野の荒神岳 荒

にこくは亦珍らしい草山の氣持の好 山々は大低頂上迄木が茂つて居るの で急いで頂上に登りました。 附近の めて、 ます。そこの爐邊で、朝飯をしたゝ 落合)の一軒家の前まで運んでくれ 拂曉三時半に沼田驛に着いて、 倒影に眺め入るのが、朝の九時半と ける頃大清水(片品川と根羽澤との 村を通り拔けて、夜の白らじらと明 の。しぜん長藏小屋は宿屋風に いふのですから全く便利になつたも ながら越えて、沼のほとりで燧岳の るやうな紅葉に身も染まる思ひをし に車を騙ると、眠りの醒めやらぬ村 便利な世の中になつたものです。 夕食どきは食堂に四十人近い人 三平峠のゆるい峠路を、

燃え

報にほつと致しました。(十月廿日) 歸りました。始めて京阪方面無事の 事に夜明を待ち途中の危險を侵して 年を越ゆる大木も根こそぎの慘狀と りかけから雨となり大股迄下つて泊 非常に便利になりませら。頂上を下 居ります。近い内に峠より登つた肩 橋を渡り高野山迄生きた心地も無く なりました。川下の橋が落ちるとの **废頂上迄登り尾根を通つて六里ケ峯** りました。明日の天候を見てもう一 に小屋が出來るさらです。その時は 神の連条より金剛と涯しなく續いて 大暴風雨となり家は飛び橋は流れ千 へ出る積りで居ましたが、夜半より 護摩ノ壇山、 ス連米より南は所謂熊野三千米から 西は紀の海北は高野荒

とは大變な變りやうです。 文みたいなものを讀んできかせた頃 翌日は鬼怒沼林道を八丁ノ湯へ越 「起て關八州の男兒よ……」と激

うなど」も考へました。 からといふ特忠家は恐らく皆無だら か一時間もあれば達し得るであらら 辿る人達の中には、せいぜい三十分 たことを想ひ出し、近頃この林道を が非常な苦勞をしてこの山に居られ に會員の沼井鐵太郎君や三田幸夫君 を道が絡らんでゆくとき、二十年前 かつたと思つてゐます。黑岩山の下 眺めはありませんでしたが、却つて 黒岩山頂へ、根曲竹を押し分けてゆ しんみりと林道の趣を味ふには、よ しました。深い樹林に霧が立罩めて

役員總會

十月定例理事會並二

峠へ、湯澤峠を越して丸沼へ、と四 同じ金山へ、根名草山を絡んで金精 西澤金山へ、手白山高薙山を絡んで の近い丸沼道を選んで歸りました。 つの道がありますが、結局最も距離 **ふ繁昌振りでしたが、宿を出てしま** 長藏小屋も八丁ノ湯も超滿員とい 八丁ノ湯からは、川俣温泉を經て

曹貴拂込について

一、

新入會員詮考ノ件

青木豐穗、井上英夫、

森本獎、

三君ノ入會ヲ承認ス

美しさとを満喫して來ました。

(十月十八日

人達があるだけで、秋山の靜けさと へば途中は時々吾々を追越してゆく

を願ひます。振替貯金の口座番號は 東京四八二九番です。(會計保) ない會員はなるべく早く拂込の手續 本年度の會費をまだお拂込になら



會 務 報

會事務所ニ於テ開催 十月十日(火)午後六時半 西堀、 小島、木暮、 石原、 藤島、塚本、 加藤、 角田、 津川、 高頭、 虎ノ門本 黑田 吉澤 木村

-; 社團法人設立準備報告 役員組織ノ件 定例理事 貝 總 俞 會

中司

會報編輯報告 山岳第三十四年二號編輯報告 ラザルニ付役員諸氏ノ御援助賜 第三十五年一號未ダ原稿充分集 第二號十一月頃配布ノ豫定

第九十二囘小集會

かつた。

二千米少しの高さでも氷河のある

本會は弦に謹みて哀悼の意を表す

眠せらる。

山岳風景」は、ブリテイシュ・コロ 來會者が集まつた。 とみえて、いつもと變らないだけの の少いのを心配したが、やつばり熱 俱樂部で開催。生憎の荒天で参會者 心な會員の足は風雨位に阻まれない 會員東良三氏の「西部カナダの新

湖水や山岳の美しい寫真に、マウン 山談で、演者一流の諧謔や氣焰も盛 ク、マウント・ガリボールデーの登 が訪れた晩香坡に近いアルタ・レー ソンなど加奈陀の名山の姿を加へら ト・レニヤ、ウオデイントン、ロブ んに出た。四十枚に及ぶ幻燈は右の ンピア州の概觀から説かれ、今夏氏 來曾者の限を樂しませた。

氣象臺の岡順次氏から「寒中富士山 頂滯在談」を何つた。 岡氏は富士に於ける氣象臺員の寒 登山の歴史を簡單に述べられ、 昭

があり、ローソクの光の下で、中央 の線に沿つてか約一時間に亙る停電

幻燈映寫中、電力節約といふ酷策

頂された折の經驗を語られた。寫真 の景觀等を映畫に収めるため登山滯 測員の生活狀態、山頂に於ける氷雪 和十一年冬、山頂觀測所に立籠る觀 のかと思はれることもあつて興味深 なるほどそんなふらに感じられるも とも山にいくらか慣れてゐる吾々に 置きであつたが、山の玄人ではなく の専門家で登山の方は素人だとの前

登山團體懇談會開催ノ件

來月開催ノ豫定ヲ以テ準備中

改 姓

H 地 久兵 TÉ. 衛 舊 古 菊 H 地 直吉 孝

古 菊

會員章再交附

岡本勝二少尉 赤羽 良一氏 於て戦死せられたり。 昭和十四年十月二十日北支石家莊に 七九一番 計 岡山市 會員番號一四六八番 報 岩井 隆

昭和十四年十月三十一日病氣の爲水 會員番號一七一七番 (I) 發 發行兼編輯者 行

東京市芝區濱松町一丁目十三番地 振替東京四八二九 電話芝(四三)一六四九 日本山 成 文 堂 FI 岳 刷 會 所 助

山と、 山との講演をきいて、外へ出るとつ を伦しく濡らしてゐた。(T・F) いふのに人通りの杜絶へた薄暗い街 めたい秋雨が、まだ背の口の十時と 三千七百何米でも氷河のな 櫻友山岳會

受贈會報部報雜誌

十月十二日午後六時から例の商工

翻東旅行クラブ 關東岳愛會 杖痕クラブ 廣島山岳會 安田山岳會 明米山岳會 中京山岳會 I·M·C 山岳會 東京地學協會 仙臺山岳倉 築地山岳會 頂山岳會 J

(ベルグロイテ)

M·M·S

景 推

雪

崩

石

(ツーリスト)

M

(地學雜誌)

昭和山岳會 橫濱山岳會 本アルカウ會

東京野步路會 阪神山岳會

山

會

TH.

旅 黑

路

會 部

報 報

(ニュース)

木

少

ルカウ趣味

本ハイキングクラブ

(N.II.C)

昭和十四年十一月廿五日發行 昭和十四年十一月二十日印刷

次

東京市豐島 區 池袋四ノ四五八 東京市芝區琴平町一(不二屋ビル) 石

Al